

# 2020年東京オリンピック・パラリンピックに対する 本学学生の意識

## Tokyo Women's College of Physical Education Students' Perception of the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics

キーワード：興味、関心、観戦、ボランティア

佐藤 理恵  
烏賀陽 信央

永井 将史  
及川 佑介

SATO Rie  
UGAYA Nobuhisa

NAGAI Masashi  
OIKAWA Yusuke

### I. 緒言

2013年9月に2020年オリンピック・パラリンピック（以下「2020年大会」という）の開催都市が東京に決定した。2020年大会の成功に向けて、2014年6月に東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と全国の大学が大学連携協定を結んでいる。その数は全国の国公立大学806校にも及ぶ<sup>1)</sup>。本学もそのうちの1校であり、オリンピック・パラリンピックプロジェクト委員会を立ち上げ、本学学生・地域住民に対して「オリパラ講座」を開催するなど、2020年大会への意識を高めるための活動を実施している。

これまで、2020年大会に関する意識調査は、内閣府により20歳以上の日本国籍を有する者3000人を対象に「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」<sup>2)</sup>が行われている。その結果によると、東京オリンピックに「関心がある」とする者の割合が81.9%と高いことが示され、「観戦に行きたい」とする者が51.2%と約半数の者が観戦に対して興味があることが明かにされている。

また、大学生に関する意識調査には、上智大学の

学生を対象にした調査<sup>3)</sup>や、北海道武蔵女子短期大学の学生を対象とした調査<sup>4)</sup>などがあり、大学生の関心や期待度・直接観戦希望率などについて調査が実施されている。

そこで本研究では、本学学生の2020年大会への興味・関心・観戦志向をはかり、さらにボランティア参加の有無やその志向を発見するため、アンケート調査を実施することとした。スポーツを「観る」「支える」ことは、「する」とともに将来の健康を左右することが明らかにされており<sup>5)</sup>、スポーツ基本法においては、スポーツを「する」「観る」「支える」人間の育成が求められている<sup>6)</sup>。東京でのオリンピック開催というまたとない機会に対する本学学生の意識を調査し検討することは、本学における2020年大会に向けた取り組みを検討していく上での有効な基礎的資料となると考える。

### II. 研究目的

本学学生の2020年大会に対する意識の実態と傾向を明らかにし、本学における今後の教育内容を検討するための基礎資料を得る。

### III. 研究方法

#### 1. 対象者

東京女子体育大学・東京女子体育短期大学に所属する学生1,722名(2019年12月時点の在籍者)を対象に、無記名によるアンケート調査を実施した。回答者は827名で回答率は48.0%であった。対象者の属性は表1に示した。

表1 対象者の属性

学科・学年	人数	割合
大学1年	229	27.7%
大学2年	159	19.2%
大学3年	152	18.4%
大学4年	119	14.4%
保健体育学科1年	22	2.7%
保健体育学科2年	26	3.1%
児童教育学科1年	71	8.6%
児童教育学科2年	49	5.9%

n=827

#### 2. 調査期間

調査期間は2019年12月4日～12月23日とした。

#### 3. 調査方法

調査方法はGoogleフォームによるインターネットでのアンケート調査とした(図1)。

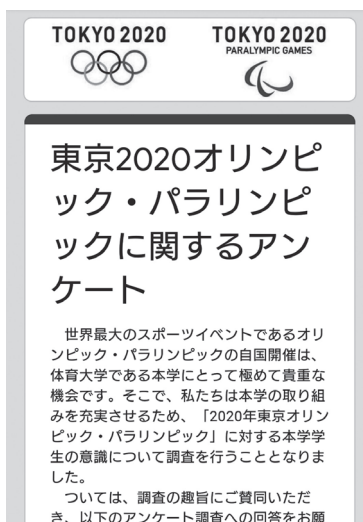


図1 Googleフォームによるアンケート調査

学生への調査依頼には、女子体育研究所から本学の教務システム(Universal Passport)を用いて対象学生へ通知し、通知内容は調査協力依頼文書とGoogleフォームのURLを掲載した。その他に、調査協力依頼文書の学内への掲示、本学教員へのゼミナールや授業での調査協力をお願い、著者らの担当授業内における学生への調査参加依頼も行った。なお、本研究は本学研究倫理審査を経た後に実施した(研倫審・2019-29号)。

#### 4. 調査内容

アンケート調査の内容は、本学学生の意識が、一般の意識とどのような差異があるのかを比較検討するために、内閣府の世論調査<sup>2)</sup>とインターワイヤード株式会社(以下I社とする)が運営するネットリサーチのDIMSDRIVEが実施したアンケート<sup>6)</sup>を基に作成した。アンケートの調査項目は所属(学年、学科、所属クラブの有無)等に関する属性項目と以下の8項目とした。

- (1) 2020年大会への興味
- (2) 招致活動への興味
- (3) 自国開催についての考え
- (4) 観戦に行きたいかどうか
- (5) 最も注目している競技
- (6) (5)の理由
- (7) ボランティアに対する興味・関心
- (8) ボランティアへの参加の有無

### IV. 結果及び考察

#### 1. 2020年大会への興味について

「2020年大会への興味」については図2に示した。「とても興味がある」が458人(55.4%)、「やや興味がある」が295人(35.7%)、「どちらともいえない」が52人(6.3%)、「あまり興味がない」が14人(1.7%)、「まったく興味がない」が8人(1.0%)という結果であった。

世論調査<sup>2)</sup>と比較すると、興味を示す値が世論調査では81.9%であるのに対し、本学学生の興味があるという数値を合計すると9割以上(91.3%)となり、

2020年大会への興味は世論調査よりも高位を示した。

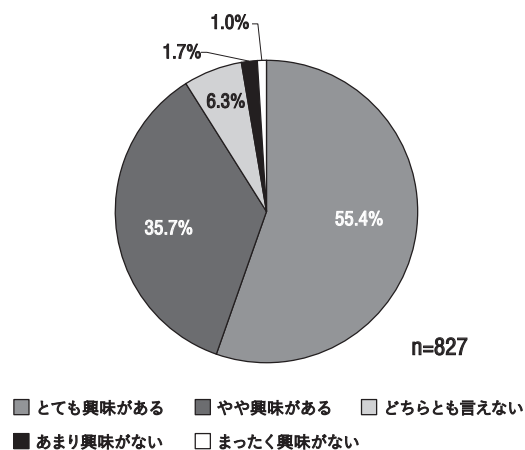


図2 2020年大会への興味

## 2. 招致活動への興味について

「招致活動への興味」については図3に示した。

「興味を持って積極的に情報を入手していたし、東京になるように応援していた」が59人(7.1%)、「興味を持っていたし、開催地が東京になって欲しいと思っていた」が378人(45.7%)、「興味を持っていたが、開催地は東京以外になっても良いと思っていた」が137人(16.6%)、「興味を持っていたが、それほど」

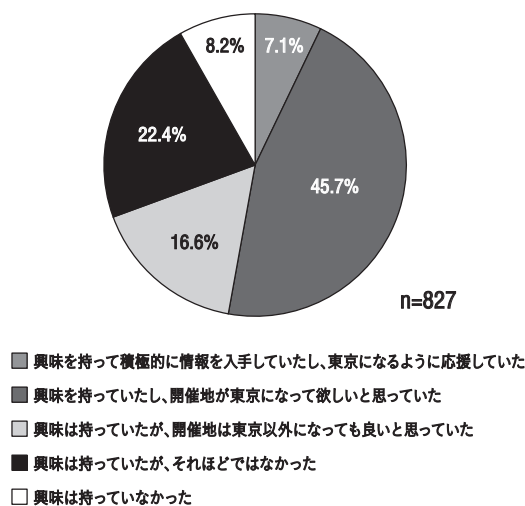


図3 招致活動への興味

でもなかった」が185人(22.4%)、「興味は持っていないかった」が68人(8.2%)という結果であった。

招致に関しては2020年大会では、東京の他にトルコのイスタンブール、スペインのマドリードが立候補していたが、回答学生の大多数が招致活動に興味を持っており、約半数の学生が東京への招致を望んでいたことが分かった。

## 3. 自国開催についての考え

「自国開催についての考え」は図4に示した。

「賛成」が476人(57.6%)、「やや賛成」が191人(23.1%)、「どちらともいえない」が132人(16.0%)、「やや反対」が22人(2.7%)、「反対」が6人(0.7%)という結果であった。

回答学生のおよそ8割が東京での開催に賛成しており、肯定的な考えを持っていたことが分かった。

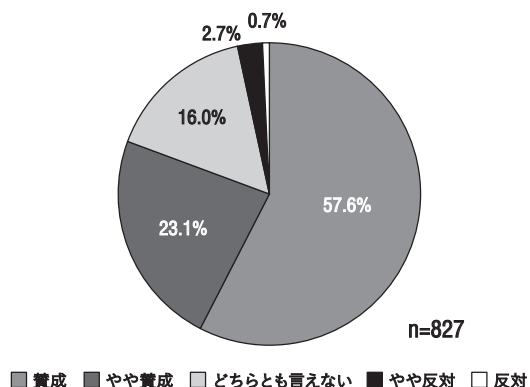


図4 自国開催についての考え

## 4. 観戦に行きたいかどうかについて

「観戦に行きたいかどうか」については図5に示し、I社が実施した調査結果と比較したものを図6に示した。

本学学生の結果については、「ぜひ観戦に行きたい」が354人(42.8%)、「都合が合えば観戦に行きたい」が320人(38.7%)、「実際には行かず、テレビなどで観戦したい」が137人(16.6%)、「あまり観戦に行きたくない」が7人(0.8%)、「まったく観戦に行きたくない」が9人(1.1%)という結果であった(図5)。

I社が実施した観戦志向の調査と比較すると、「ぜひ行って観戦したい」、「都合が合えば観戦したい」、「実際には行かず、TVなどで観戦したい」において本学学生が高位を示し、「あまり観戦したくない」、「全く観戦したくない」においてはI社の調査結果が高位を示した(図6)。

また、I社の調査によると、「都合が合えば観戦したい」が最も高位を示したが、本学学生は、「ぜひ観戦に行きたい」が最も高位を示したため、本学学生は一般の回答者より、実際に競技会場に行って現地で観戦したいという思いが強く、非常に行動的な傾向があるものと推察される。

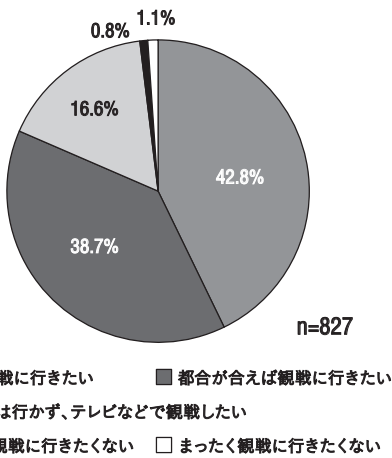


図5 観戦に行きたいかどうか

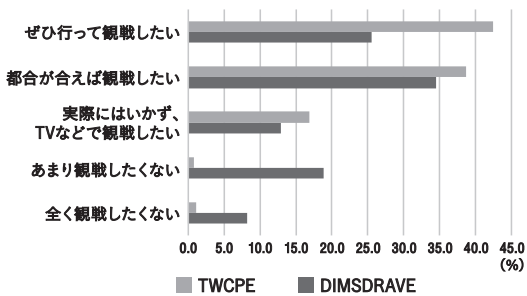


図6 本学学生とI社 (DIMSDRAVE) との比較

5. 最も注目している競技について

2020年大会において「最も注目している競技」についての結果は、図7に示した。

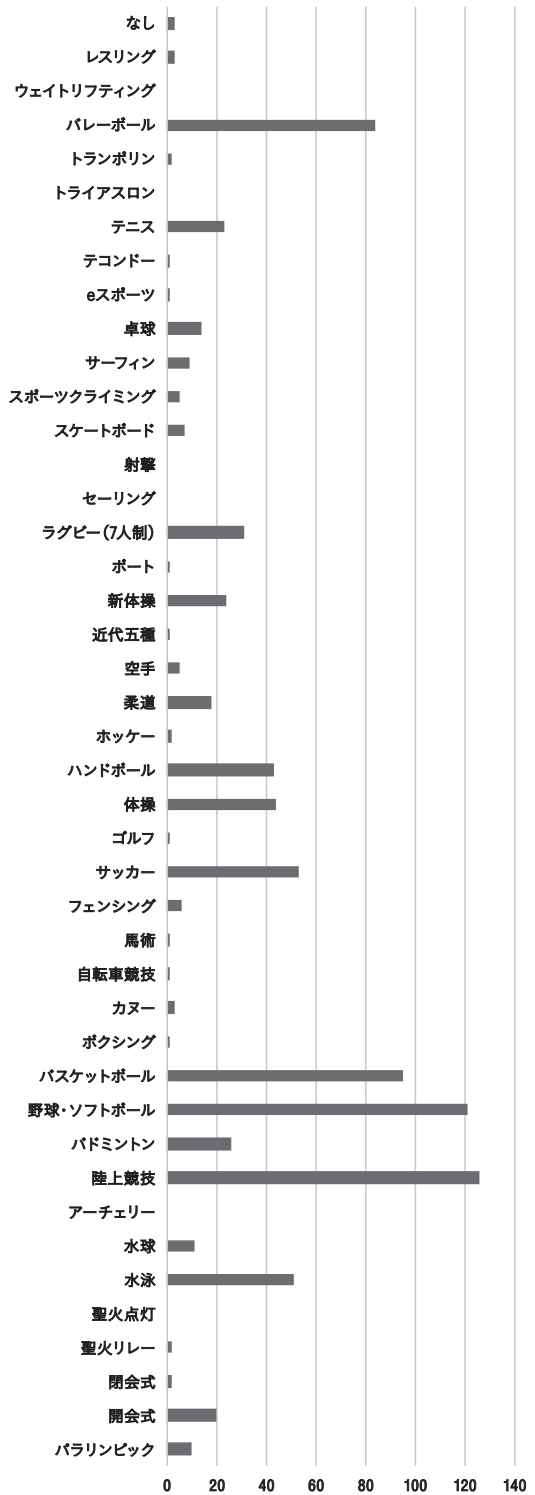


図7 最も注目している競技

本学学生の「最も注目している競技」は、「陸上競技」(126人)で、次いで「野球・ソフトボール」(121人)、「バスケットボール」(95人)、「バレーボール」(84人)、「サッカー」(53人)、「水泳」(51人)、「体操」(44人)、「ハンドボール」(43人)の順に注目度が高かった。

I社が実施したアンケート調査の結果によると、上位から水泳、体操、陸上競技、サッカー、開会式、柔道、バレーボールが挙げられており、本学と比較しても柔道、開会式以外では似たような結果であった。

また、本学学生が注目している競技は、本学のクラブ活動の競技種目が多く選ばれており、特に陸上と球技種目が多い傾向にあった。以上の結果から、本学学生はクラブ活動が活発な種目を身近に感じる傾向があることが推察された。

一方、開会式や閉会式、聖火リレーなどのイベントにおいては、注目度が低い結果となった。さらにパラリンピックにおいても注目度が低く、今後はオリンピックだけでなく、パラリンピックへの注目度を高めるための取り組みが必要であるということが明らかになった。

## 6. 最も注目している競技の理由について

「最も注目している競技の理由」については図8に示した。

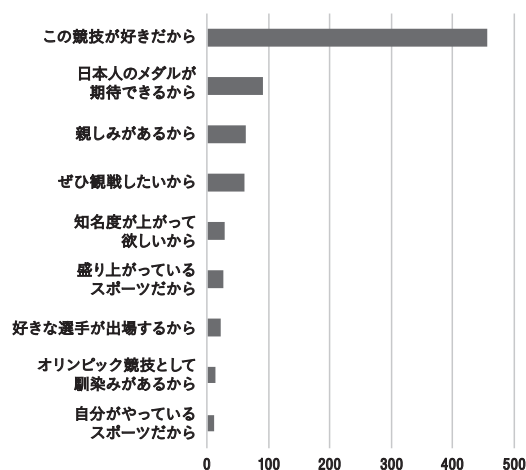


図8 最も注目している競技の理由について

選択した理由として、「この競技が好きだから」が457人、「日本人のメダルが期待できるから」が91人、「親しみがあるから」が62人、「ぜひ観戦したいから」が61人、「知名度が上がって欲しいから」が28人、「盛り上がっているスポーツだから」が27人、「好きな選手が出場するから」が23人、「オリンピック競技として馴染みがあるから」が13人、「自分がやっているスポーツだから」が12人という結果であった。

約半数の学生が、自分の好きだと思う競技に注目していることが明らかになった。

## 7. ボランティアに対する興味・関心について

「ボランティアに対する興味・関心」については、図9に示した。

「開催前からとても興味があった」が117人、「東京での開催が決定してからとても興味があった」が268人、「東京での開催が決定してからやや興味があった」が248人、「どちらともいえない」が108人、「あまり興味がない」が62人、「全く興味がない」が24人という結果であった。

以上の結果から、東京での開催が決定したことで、学生自らが2020年大会にどのような関わりが出来るかを考え始めたと考えられる。東京開催が決定しボランティアに関する情報が提供されてから積極的な行動に意識が転じており、本学学生の特徴としては、情報を入手できれば持ち前の行動力を発揮し、授業での学習に言い換えると「少し教えたら伸びていく」のではないかと推察される。

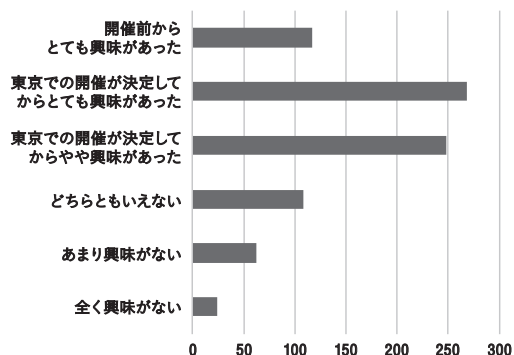


図9 ボランティアに対する興味・関心

近年、特に若者のボランティアへの感心の低さが指摘されている中、学校教育においてもボランティアを通して地域と関わる術を身に付け、地域社会を創造する担い手としての自覚を持つための学習が重要とされている。松岡ら<sup>8)</sup>はスポーツボランティアの動機について、仕事を積み重ねることで動機に変化が生じることを述べている。本学学生もボランティア講座や地域交流センターの募集、クラブ関係等で地域でのボランティア活動を行っている学生が多く、これらの経験が2020年大会のボランティアに対する興味に繋がったのではないかと考えられた。

## 8. ボランティアへの参加の有無について

「ボランティアの参加の有無」については図10に示した。

アンケート結果から、「自分で申し込み参加することになった」が30人、「所属団体から要請があり参加することになった」が74人、「申し込んだが採用されなかった」が81人、「申し込みをしておらず、参加しない」が642人という結果であった。

前項の結果と併せて、ボランティアに対する興味・関心では興味を持っている学生が約半数もいたにも関わらず、申し込みをしておらず、参加していない人数が非常に多い結果となった。

ボランティアの参加動機においては、「愛他的動機」が主要な因子であると報告されている<sup>9)</sup>。大学教育におけるボランティア活動に対する教育支援は実践的で充実してきていることから、学生はボランティアへの参加意欲は高いが、2020年大会でのボランティアに関しては、大会前の研修会等の都合が合わ

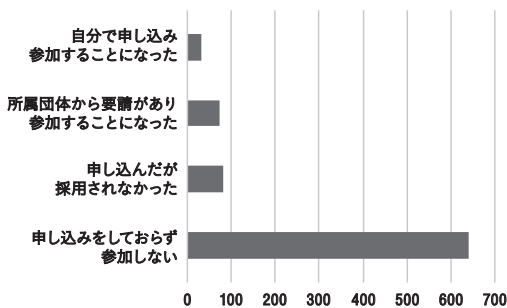


図10 ボランティアへの参加の有無

ず、参加するまでに至らない学生が多かったのではないかと考えられた。

また、参加が決定した学生は、主に組織委員会が募集している大会ボランティア(競技会場・選手村等の施設等での競技運営サポート)が多く、東京都が募集する都市ボランティア(空港・主要駅・ライブサイトでの観客案内や運営サポート)が少ない結果となった。

## V. 結論

本研究は2020年東京オリンピック・パラリンピックに対する本学学生の意識について、アンケート調査を実施し検討した。また、ボランティア活動への参加の有無についても調査した。その結果は以下のことが明らかになった。

- ① 本学学生の2020年大会への興味・関心は一般より高位であった。
- ② 観戦志向は実際に現地に行って観戦したいというアクティブな志向を持っていた。
- ③ 注目している競技については、本学のクラブ活動からの影響が強く、陸上・球技種目が多かった。
- ④ ボランティアに対する意識では、情報を得ることが出来れば積極的に行動するという特徴が示唆された。
- ⑤ ボランティアへの参加には多くの学生が興味を示していたが、実際に参加する学生は少なく、所属団体からの要請による参加が多かった。

本研究では回答者全体の結果のみを検証したが、今後は学年・学部・クラブ別等の比較検証を行い、研究を深めていく必要がある。本研究で得られた知見を基礎資料として、オリンピック・パラリンピックおよびボランティアへの関わりと学生の学習との関係について考察を深めていくことが課題となるであろう。

## VI. 引用・参考文献

- 1) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会HP. 大学連携, 連携大学一覧. <https://>

tokyo2020.org/jp/getinvolved/university/list/  
(2019年12月23日閲覧)

- 2) 内閣府政府広報室HP. 世論調査, 平成27年度, 東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査 (2016). <https://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-tokyo/index.html/> (2019年12月23日閲覧)
- 3) 師岡文男, 天野雅道 (2013) 上智大学生の2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に対する意識調査. 上智大学体育. pp. 47-49.
- 4) 桂玲子 (2014) 「2020年東京オリンピック・パラリンピック」開催についての意識調査: 本学学生の課題を探り、講義の在り方を検討する. 北海道武蔵女子短期大学紀要. 46. pp. 85-97.
- 5) 柴田陽介, 早坂信哉, 野田龍也, 村田千代栄, 尾島俊之 (2011) 「する・見る・支えるスポーツ活動と主観的健康観の関連」. 運動疫学研究. 13. p. 3.
- 6) スポーツ庁HP. 政策, 制度・予算等, スポーツ基本法, リーフレット (PDF), スポーツ基本法リーフレット (文部科学省, 2012). [https://www.mext.go.jp/sports/content/1310250\\_01.pdf/](https://www.mext.go.jp/sports/content/1310250_01.pdf/) (2019年12月23日閲覧)
- 7) インターワイヤード株式会社, ネットリサーチディムスドライブHP. 公開テーマ別調査, 詳細情報, 「2020年オリンピックと招致活動」に関するアンケート. <http://www.dims.ne.jp/timelyresearch/2013/130904/> (2020年1月9日閲覧)
- 8) 松岡宏高, 小笠原悦子 (2002) 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学. 52 (4). pp. 277-284.
- 9) 長々原 誠, 山口泰雄 (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究—ボランティアの継続的意欲の視点から—. 鹿屋体育大学研究紀要. 6. pp. 69-75.